

芦屋建設業組合

永瀬隆一さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

芦屋ブランドと言われるが、 実際は他のまちと変わらない

芦屋らしさとか芦屋ブランドというのは、外から見た印象で、芦屋の人はみんな裕福かというところではありません。非常に裕福な層が一部の地域に居住しているものの、残りのエリアは、多様な人が住んでおり、他のまちと変わりません。

そういったことは、他市からは見えていない部分ですが、実際に市民が抱えている問題はそこにあります。

外の人が芦屋をウリに商売を始めるが、 中身がついていかず続かない

よそから来た人が、芦屋ブランドを口にする理由は、芦屋らしさとか芦屋というブランドネームで商売をしようとしているからです。芦屋で代々商売している人は、芦屋をウリにせず、自分のところで培った技術や信用で商売しており、そのずれがあるように感じます。

芦屋で商売している立場としては、長く一緒にやっていきたいと思っていますが、2～3年で変わっていく店が非常に多いのが現状です。芦屋らしさを売ったものの、中身がついて来ず潰れてしまうのでは、少し違うのではないかと感じています。

◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

本物を見極める目を持つ人が多い

裕福だから高いものが好きというのではなく、金額に関わらず、おいしいものはおいしい、良いものは良いと、必要なものに必要なだけお

金を使う人が多く、そういう人は上品だと感じます。本物を見極める目を持った人がいるのは、ひとつの芦屋の良さではないでしょうか。


我々建設業では、こだわりのあるものを作らせてもらえるし、それがまちに残っていくというのが経験にもなりますし、誇りにもなります。



◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思えますか？

地域の中での住民同士のつながりのあるまち

芦屋に住み大阪や神戸に働きに行っている若い人たちと昔から住んでいる人をどうつないでいくかが、今後の課題だと思います。祭りなどでは、そういった人たちも参加してくれませんが、準備を手伝うかというところではありません。手伝いたいけど、手伝い方がわからないというのもあるのでしょうか。自治会や地域活動に参加したい人も中にはいるので、一緒に活動できればまちも変わってくると思います。



住民と商売人のお互いの顔がみえるまち

もともとは、商店街のあるまちでしたが、阪神・淡路大震災以降かなり店が減り、横のつながりもなくなりつつあります。

芦屋市の人が市内の店を利用することでまちが活性化することが一番だと思うので、そういったつながりできれば、まちも変わるのではないのでしょうか。




住んでいることに誇りを持てるまち

住んでいる人が、自信や誇りを持ち、芦屋らしさを語れる日が来れば素敵だろうと思います。実際に、市外から芦屋に引っ越して来て、自分の住んでいるまちを汚したくないと、タバコのポイ捨てをやめた人がいます。

芦屋に住むことで、その人の意識が変わるようなところが、芦屋らしさであろうと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？



住民の意識を高めることで犯罪発生率を減らす


引ったくりやチカン等の犯罪も多いので、防犯カメラの設置で、住民の認識を高めたいと思っています。



既存の製造業を維持することも必要

芦屋市として、新たな工場も作りたくないし、大企業も誘致したくないのだと思います。しかし、一旦工場を潰すと新たに建てることができないため、製造業は、今ある工場を使い続けなさいといけません。そうなると、本社だけ芦屋に残し、市外に工場をつくるなど、市外に移転してしまう可能性が高くなります。

市内産業の活性化



市外業者が公共工事を多く受注すると、市内業者の工事量が減少し、その分の税収が少なくなります。逆に、市内業者ですべてまかなえるわけかというところ、そうではないので、難しいところではあります。

建設業組合や商工会でも会員数を増やそうとしていますし、異業種交流の見本となるべく新世会という老舗の会を立ち上げています。

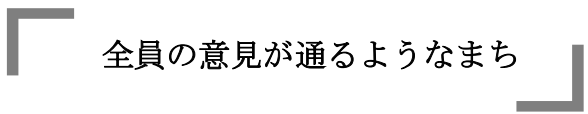
商売人はクリーンな商売をし、客もトラブルのないお客さんであってほしいし、悪い人が得したり、正直者が馬鹿を見るということではダメだと思います。



地域のさまざまな声を聴くことが重要

地域ごとに様々な意見がある中、市がどう対応していくのかが重要であると思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・



全員の意見が通るようなまち

大多数で決めると良い方向を向くはずですが、市の政策や施策を有識者で決めたといわれることも多くありますが、だれが決めたのかわからないことも多いので、市民の意見を聴くことが重要です。

兵庫県宅地建物取引業協会

芦屋・西宮支部 支部長 新谷 勝彦さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

高級住宅都市

芦屋は基本的に工場などがない住宅都市で、その中でも特に高級住宅都市と言えらると思います。経営者や医者の方が多いためか、個人の住民税納税額が全国市町村の中でも常に最上位という地位をずっと保ってきており、お金持ちの人が多いまちというイメージが確立されています。

教育環境がよいまち

阪神間の中でも特に教育環境が良くて、周辺に有名私立の学校が集中しているまちです。そのため、芦屋の教育レベルは高く、また、教育に熱心な人が集まるのだと思います。

この結果、芦屋に住むことによって、自然によい感性が身につくので、それを求めて来る人も多くなります。そこで出来た友達は一生の友達となり、同じように年を重ねた時に一緒に仕事もできるよい関係にもなる。このような循環ができており、よい子どもの教育環境を求める人が芦屋に集まるのだと思います。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

良好な街並みが保たれているまち

例えば、東京の「田園調布」とか「松濤」といった名だたる住宅地を見に行っても、その地域には戸建てとマンションなどの集合住宅が混在している場所があります。

ところが、芦屋の六麓荘にしても岩園町にしても非常に大きな戸建て区画となっており、そこに分筆規制というものがあって一定の街並みを守っています。このような取組が、結果的によい街並みの維持に繋がっているのです。私はそれが芦屋の強みではないかと思っています。

住宅に特化したまち

工場をつくれないうちというのも芦屋の強みだと思いますが、一方で規制が非常に厳しいことが弱みになる場合もあると思います。

震災で三八商店街や本通り商店街がなくなってしまいましたが、復興の過程でも色々な規制があったため商店街が戻ることはありませんでした。そういう意味で芦屋は住宅に特化したまちになっています。

商店街や市場を残すためには、そのためのまちづくりのコンセプトが必要

震災で商店街や市場が少なくなりましたが、もし、芦屋が商店街や市場を残したかったのであれば、私はまちづくりのコンセプトをもっと研究する余地があったのではないかと思います。今は駐車場に関する条例など、色々な規制に縛られています。

芦屋で商店街を作るのであれば、表側は人が通る商店街の中の歩行者専用道路にすべきですが、裏側は商品等の搬入・搬出のための道路

を整備し、表と裏の二面道路にするべきだと考えています。このように店舗が並ぶまちづくりをするためにはコンセプトが必要です。

今後、もし阪急芦屋川周辺を区画整理するのであれば、そのようなコンセプトを参考にして、芦屋山手サンモール商店街という地元の人のための商店街としてのあるべき姿を考えて欲しいと思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？

★ 長期的な海外のインフラのあり方を参考に

私はヨーロッパのまちなどを多く見てきましたが、例えばイタリアでは実に1000年前の家に住んでいたりします。またパリでは200年前の家に住んでいます。これは1800年代に大改造したまちを建替えることができないから当たり前のことなのです。

ローマ時代にローマ軍によりまちの骨格が形成され、石畳の道の下には大きな下水道が縦横無尽に整備されています。そしてその下水道を現在も使っており、その空間の中に電気や電話やガス管も通しています。ですから何かの工事が必要になっても、日本のようにその都度、道路を掘り起こすようなことはありません。

一方、日本は縦割り行政で、水道管は行政、ガス管は大阪ガス、電力ケーブルは関西電力といった形で、全てが別々の管理になっているので、結果的に多くの無駄が発生しています。

私は、日本でもヨーロッパのような超長期的なコンセプトのまちづくりを進めて欲しいと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？

★ 100年先を見通したまちづくり

先述の通り、地下のインフラ整備から始めるべきかもしれませんね。100年先を見越したまちづくりとも言うべきものを考える必要があ

るのではないのでしょうか。

★ 思い切った長期計画が必要

芦屋を魅力的なまちにするために必要な取組としては、まず長期的に見たまちの理想像をビシッとつくり、そのために何をしていくのかという思い切った長期計画のもとでまちづくりを進めていくことが重要だと思います。

それが思ったよりも時間がかかろうとも、首長が変わろうとも、このコンセプトは決して変えない、というくらいの姿勢を持って、行政も市民も手を携えてまちづくりに取り組むべきでしょう。それが理想のまちに繋がっていくと私は思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

「誰もが住み続けたいと思うまち
一度は住んでみたいまち」

日本全国から視察に来られるようなまちであり続けるのはとても大事なことです。

「住み続けたいまち」、「一度は住んでみたいまち」が芦屋市の理想の姿だと思います。

芦屋警察署

生活安全課長 藤井義典さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

便利で緑豊かなまち

道路や鉄道網が整備された便利で、緑豊かなまちという印象があります。また、閑静な高級住宅地があり、調和の取れた景観が芦屋ブランドになっていると思います。

犯罪者心理から狙いやすいまち

近隣市と比較して犯罪発生率は少ないですが、犯罪者心理から言うと狙いやすいまちでもあります。

自転車の無施錠での被害や窓に鍵をかけない自宅での空き巣被害なども発生していますが、これらは少しの注意を払うことで防げることも多いと考えています。

警察では、全ての市民の方に防犯意識を持ってもらえるよう、各地域の団体と協働した「防犯抵抗力の向上」の活動を推進しているところです。

住民組織がしっかりとしている

市内に 80 以上の自治会・町内会があり、まちづくり・防犯グループのある組織も約 60 箇所はあります。それ以外にも婦人会や老人会などの組織もあり、住民組織がしっかりとしているまちだと思います。



◆ 芦屋市の強みは何だと思いますか？

親しみやすい土地柄

芦屋署に赴任当初は、地域の人との関係づくりが課題でしたが、自らが住民の中に積極的に深く入っていくとすぐに打ち解けてもらえました。さらに顔見知りになると、気軽に話をしてくれたり、日々の心配ごとについて相談してくれたりしますので、警察署員にとっても親しみやすい土地柄だと思います。

防犯活動に取り組む多数の住民組織の存在

日々の警察業務の中で多くの市民の方と意見交換をする機会を得て、「防犯抵抗力」について理解していただける市民も増えつつあります。また、各地域で防犯活動している多数の市民の存在も知ることができました。

今後も、市民の皆さんと一緒に協力して、防犯活動、子どもや高齢者の見守り活動をより強力に取り組んでいきたいと考えています。

住民組織間のネットワークが形成されている

芦屋市は市民の防犯意識が高いまちです。様々な住民組織は、それぞれのネットワークができていますので、活動するうえで連携が取りやすいという強みがあると思います。

芦屋市での取組は波及効果がある

芦屋市は知名度が高いのでマスコミなどで取り上げられる機会も多く、芦屋市での取組は大きな波及効果があります。

今年、「芦屋市児童虐待事案早期情報提供制度」を開始しました。この制度は、医師や救急隊員が虐待の恐れのある子どもに接した場合、緊急度が高いと認められれば、すぐに警察に直

接通報をしてもらうものです。警察にいち早く情報集約されるこの制度は全国的にも珍しい制度となっています。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思いますか？

 人に優しいまち


今後、芦屋市でも高齢化率が上昇して確実に高齢者の人数が増えます。それに伴い、認知症の方の人数も増加すると考えられます。

認知症の方への対応は、土日・夜間の取組体制が課題となっていますが、10年・20年後には、子どもや高齢者などの要支援者を市民や関係機関が一体となって見守り、手を差し伸べられる「人に優しいまち」を目指していければ良いと思います。

 関係機関の連携が強化されたまち

面積の狭い市ですが、将来、街並みも変化しますし、人も流動していきます。その中で関係機関と連携した取組の強化を一層進めていきたいと思っています。


◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思えますか？

 やるべきことをしっかりとやること

どこの市町でもやっていないような独創的な取組を、各部局が市民目線で考え、実施することが大切です。

行政機関の機能を強化し、官民の連携を強めること、例えば休日、夜間体制の構築など、「やるべきことをしっかりやる」ことで市民に安心を与えることができ、魅力あるまちづくりにつながると考えています。

市民のためになる取組を、市民の意見も聞きながら、官民一体となって実施することも重要だと思えます。

 市民の生活課題へのきめ細かな目配り

警察には色々な110番電話がかかってくる。夫婦喧嘩の仲裁を求める声、子どもの虐待に関わる声、子どもが勉強しないので叱ってほしいという電話もあります。何であれ、話を聞いてあげると、相手はスッキリと納得します。

今は、このようなことへの対応も警察に求められる時代となっていますが、今後も警察は色々なところに飛び込んでいきます。警察がこのような細かなことまで目配りをするのも、芦屋市をよいまちにするための重要なポイントではないかと考えます。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

市民が安心して暮らせるまち

芦屋市消防団

団長 岸野 雅信さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

火災が少ないまち

芦屋市はおかげさまで火災件数がすごく減少しています。住宅設備や環境がよくなっていて火災が減ったのだと思います。

私が入った頃に比べたら年間の火災件数が4分の1程度になっており、火災が少ないまちという印象を持っています。

防災に対する意識が高いまち

自主防災訓練の方に指導・参加を毎年、毎回させてもらっています。参加される方は意識が高いと思います。

ただ、新興住宅地では引越し件数も、人の出入りも多いので、把握は難しいのですが、訓練には皆積極的に毎回多くの方が参加していただいています。

意識の地域差があるものの、若い人も参加もある

消防団にも地域の差や特色はあります。

例えば、「岩園」はサラリーマンが多いことや、人の出入りが多いなどのためか、消防団員は減少しています。一方、「打出」は商売の方が残っているし、昔からの人が多いので消防団員は減っていません。

芦屋市では今の所、結構若い人が消防団に入っています。先日、阪神間の消防団の会議がありましたが、その中で芦屋市の消防団員の平均年齢は少し低かったと思います。最近では若い人も少しは興味を持ってきているのかなと思います。

消防団員の連携の強さが芦屋市の特徴

芦屋市は消防団員の人数が他市と比べても少なく、定員が134人となっています。尼崎が1000人、西宮、三田は700人規模です。ただし、芦屋市は消防団員が少ないものの、連携に関してはどこにも負けていないつもりです。市域が小さい分、連携がしやすいというメリットはあります。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

強みはやはり「住みやすさ」

芦屋市の強みは、何と言っても「住みやすさ」でしょう。

逆に、芦屋市の足りていない点は、人の入れ替わりが結構多いので、芦屋のことを分かっていない人がたくさんいるということです。そのような人たちに対してもっとアピールが出来る、共感できればいいと思います。

具体的には、消防訓練をしていて苦情が入ることがあります。そのため、訓練場所も限られてしまいます。この辺りをもう少し理解してもらいたいと思います。

昔のことになりますが、もともと芦屋は商売人が多かったので休みが月2回(1日と15日)しかありませんでした。そのため、その休みの日の夕方から訓練をしていました。しかし、今は一切できません。実際の火事は夜に多いので、本当はその時間帯に訓練ができるのが一番いいのですが、その辺りが理解を得られてないところでは。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思いますか？

火災ゼロのまち

私としては火災ゼロです。皆さんに防災意識を上げてもらって火災ゼロのまちになるのがいい。消防団は訓練するだけでいいのが理想です。

消防団は、火災出動がなければ当然啓発に力を入れます。今、定員まであと20人程足りません。私はそれを一杯にして市民への啓発活動ができればいいと考えています。

昔、火災が減ったので消防団を減らそうかという動きもあったようです。でも、たくさんの消防団員がいるからこそ、意識が高まり火災が減少してきていると私は思っています。

常備消防や近隣の消防団との連携を深めたい

これからは、常備消防との連携をもっと深めていきたいと思っています。今回、会下山で山火事の訓練を消防本部と合同で行う予定になっています。今回は東灘も一緒に実施します。今後、こういう合同訓練をもっと増やしていけるようにしたいと思っています。

大災害になると、他地域の消防団との連携は特に重要になりますから。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？

魅力ある消防団づくり

まずは「魅力ある消防団づくり」です。魅力ある消防団を目指していけば、「まち」の魅力アップにも自然となり、それが最終的に火災件数ゼロにつながればいいと思っています。

芦屋市に期待すること

独自でツイッターは立ち上げていますが、もう少し消防団の活動をPRしていただければありがたいです。「広報あしや」や市のホームページを使ってもらえればと思います。

今も団員募集とかを各自治会の会長さんをお願いして、自治会掲示板に貼ってもらっていますが、ぜひ芦屋市の広報掲示板にも掲載してもらえればありがたいです。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

火災ゼロのまち

芦屋市自主防災会

会長 竹内安幸さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

全国的に知名度の高いまち

芦屋市は国から「国際文化住宅都市」の指定を受けており、全国的に知名度の高いまちです。西の芦屋，東の鎌倉とされています。

日本一美しいまち

市民意識として、「日本一美しいまち芦屋」は定着していると思います。まちの中にゴミがないのはその現れではないでしょうか。

治安がいいまち

芦屋市は治安のいいまちですが、その反面、他のところの人から狙われやすいまちでもあると思います。

高齢者の多いまち

芦屋市は高齢者の多いまちです。もちろん地域により状況は異なりますが、特に山の手地域は高齢化が進んでいます。

坂が急な地域であるのに、交通機関が弱い面があり、地域からはコミュニティバスの運行の要望が出されていると聞いています。

若い人には少し住みにくいまちかも

若い人は少し住みにくい土地柄かもしれません。何より土地代や家賃が他都市に比べて高く、所得が十分でない人は生活面で住みにくいのではないのでしょうか。地元のスーパーに置いてある商品も品物がいい分、価格も高めのように思います。それも芦屋の一つの側面でしょう。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

人のつながりが強い

40年程前から芦屋市に住んでいますが、その昔はあまり隣近所と関係を持たない、付き合いの少ない住民が多かったように思います。

ところが、阪神・淡路大震災以降、人のつながりや関係性を持つ人が多くなりました。震災時には、被災者の75%が隣近所の人に助けられたと言われています。震災当日は市内全域が混乱の最中であつたので、被災者の多くが行政や消防ではなく、隣近所の人に救助されました。

今でこそ、自助・共助・公助という役割分担の概念がありますが、震災時はそんな概念も当てにできなかったもので、まずは、自助、次に近所の助け合い（共助）しか選択肢はありませんでした。

しかし、震災後はその経験が契機となって、隣近所の付き合いや関係性は強まり、現在は根付いてきていると言えるのではないのでしょうか。



自主防災活動が活発

自主防災組織や自治会の活動も活発化し、今では加入率が8割の地域もあるようです。

防災訓練は自治会レベルでやっています。その理由は、訓練を通じてご近所同士が顔見知りになれるメリットがあるからです。

今ではその効果もあり、市民の災害に備える意識や助け合い意識は高まってきています。

最近、「子ども防災」というテーマを設定し、子どもが参加しやすい雰囲気づくりに努めているところでは。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？



日本一美しく、安全・安心なまち

芦屋市は、花や緑がいっぱいのまちです。これまで「日本一美しいまち」を掲げてきましたが、これからは「日本一美しく、安全・安心で住みよいまち」にしていく必要があると思います。

安全・安心面では、私たちは「夜間パトロール」の取組を進めています。「パトロール中」と書いたラベルをカバンや自転車などに張り付けて市内を見回っています。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？



まちづくりの方向の具体策を示す

人は「まちのイメージ」だけでは住むことはありません。その「まちのイメージ」に近づけるために、例えば、街角に花壇を設置し、四季を通じて花で飾るような住民活動があれば、その場は近所付き合いの「場」となります。「場」をつくれば人は集まります。高齢者も集まります。芦屋公園南側や臨港線付近にもきれいな花壇があります。そのような具体的な「場」を見せることが大切だと思います。



病気にならない予防活動を重視する

今は、高齢者が高齢者を支える時代です。

そのためには、高齢者が健康であるための場づくりが重要になると思います。

病気になってからの対応を考えるのではなく、病気にならないための予防活動が大切なので、行政もその方向に力を入れるべきだと思います。例えば、街角サロンのようなものが必要になってきているのではないのでしょうか。



高齢者の見守り活動の充実する

「安全・安心のまち」を実現するためには、高齢者の見守り活動も必要です。これまで見守り活動は民生委員が中心となって担ってきましたが、これからは民生委員だけでは全てをカバーできません。

高齢者の見守りは、日頃からの声掛け運動が大切です。例えば、私の住んでいる地域では、高齢者グループを自治会の中に位置づけ、様々なグループ活動を通じて高齢者が家に閉じこもらないように見守りをしています。また、見守りだけでなく一緒に旅行に行ったりするなど、互いの親睦を図るようにしています。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・



日本一美しく、
安全・安心で住みよいまち



まちづくり防犯グループ連絡協議会

会長 岡田 龍一さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

落ち着いたまち

芦屋は、落ち着いたまちです。パチンコ店がない。ネオン・看板も目立たない。これも屋外広告物条例のお陰だと思います。

ただ、イベント開催時の「のぼり旗」なども規制対象となっているのですが、それが使えたら便利と思う時もあります。でも条例が出来てからまち全体がスッキリしてきたように感じます。

まちが美しい

まち全体が美しいです。特に緑がきれい。家の前にそれぞれの家が花を出しているのもすごく良い。自分の家の周りをきれいにすることで、それは同時にまち全体をきれいにしていることにもなっていると思います。

私たちは、朝の見守り活動、声掛け活動をしています。子どもたちが通学するのを単に見守るだけでなく、きれいな所を通らせてあげないといけないという気になります。通学路がきれいと感じ方も変わります。ですからゴミやタバコのポイ捨ては非常に気になります。

それとゴミステーションのカラス問題も気になっています。芦屋では、ちりとりと箒を持って立っている近所の方もおられますが、まちをきれいにするこれらの行動は非常に大切なことだと私は思っています。

事故・事件が少ないまち

感覚ですので、警察の統計とは違っているかもしれませんが、私は、芦屋は事故や事件が少ないまちだと思います。

私たち防犯グループの活動は子どもたちが

事故に合わないように、日々、見守り活動を続けているのです。

事件も少ないように思います。変質者が出たという情報もあまり聞きません。

◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

教育が行き届いている

市内の小・中学校の児童・生徒に話をする機会がありますが、そのような機会に芦屋の子どもたちを見ていると、実にしっかりしているなあと感じます。かつてはちょっと荒れた時期もありましたが、今はとてもしっかりしているように思います。昔は夜遅くにコンビニにたむろしている子どもたちもいましたが、今はそういう光景は目にしません。



景観がいい、市民がまちをきれいにしている

海あり、山あり、緑あり、家の前に花があるということで、まち自体が非常に美しい、景観がいいと思います。先程も言いましたが、自分の所をきれいにしようという市民の行動が、結果的にまち全体をきれいにしていると言えると思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？



人と人のつながり、思いやりが密になること

今は近所付き合いがだんだんと疎遠になってきているように思います。10年、20年後はもっとつながりが離れていってしまう恐れがあるので、それを心配しています。今以上に近隣関係を密にするというよりも、むしろ今以上にダメになるのを防ぎたいと思っています。

近所付き合いが薄くなってきたことから生じる問題もたくさんあると思います。自治会の方でも近隣関係を密にしようといろんな活動をされていますが、これは難しい問題です。

あと、南北間の地域のつながりが少ないように思います。道路による地域分断やバス交通が十分に機能していない面もありますから。乗り換えも必要になりますしね。

山手と浜手の地域同士の交流ができればいいと思います。



子どもや高齢者にやさしいまち

子どもたちに対してのやさしさは大人が持たないといけません。ですから防犯グループでは子どもたちの見守りや声掛け活動を実施しているのです。

でも高齢者に対するやさしさの方が問題かもしれません。例えば、稲荷山線のような場所では、時間帯によっては、子どもたちの通学と通院する高齢者が歩道で錯綜して大変危険な状態になることがあります。この前もぶつかって高齢者がこけてしまったことがありました。

このような場所では、高齢者に対して声掛けをしてあげることが大切だと思います。「大丈夫ですか？そこで休んでいけばどうですか？」とかね。そのためには歩道にベンチを1つや2つ置いて欲しいですね。

気軽に高齢者の方に声を掛けられるような環境ができれば、また、そういう意識を盛り上げられるようになればいいと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？



歩道を歩きやすく、車いすが通れるようにする

歩道が悪いところがあると思っています。狭い歩道に電柱がたくさん立っていたり、路面が斜めになっていたり、車いすが通れない道があります。

歩道が歩きやすいというのは大変重要なことではないでしょうか。



高齢者用のスポーツ施設を増やす

これから高齢者がどんどん増えるので、高齢者用のスポーツ施設を増やして欲しいという声も聞いています。

公園でゲートボールをしていると、音が反響してマンションなどからうるさいという苦情が入るみたいです。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

「安全、美、緑」

私の理想のイメージは、「安全で緑が豊かな美しいまち」というものです。

あと、災害時対応なども含めて市職員には市内に住んでもらえるようになって欲しいという意見もグループ内ではありました。

芦屋青年会議所

理事長 三浦宏太さん、副理事長 天王寺谷祥一さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

歴史・文化的な背景があり、 自然と人とのバランスが良く住みよいまち

芦屋市は山、海、川があり、市域が非常にコンパクトにまとまっている中に、歴史的文化的背景による深みがあり、ずっと人が住んで愛してきた雰囲気を感じることができます。

自然とのバランスの良さが愛されてきた一番の理由であり、大都市に挟まれたアクセスの良さもあって、住みやすいまちという印象です。車で道路を走っているだけでも、芦屋に入ったというのが雰囲気わかります。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

住環境が良く人が温かいほっこりしたまち

住環境が良く、ブランディングがしっかりしていて全国でも有数の住宅都市として名が知られている点が強みです。一方で、お金持ちのまちというイメージが先行してしまい、芦屋というまちが誤解されていることが弱みにもなっているように感じられます。

内と外のイメージのギャップがありますが、実際に住んでみると、隣の人は何をしているかわからないといった都会的なギスギスした感じはなく、人があたたかく、自治会、だんじりや神社、消防団など地域のつながりも強くて、住みやすいまちだと感じています。外からみるよりもほっこりとしたまちだと感じます。

住民の文化水準とまちを愛するプライドが高い

住んでいる人の文化水準が高く、心に余裕があるから、人に優しくできるのだと思います。助け合いの精神が行きわたっていて、相互の関係性ができています。

また芦屋の人は、びっくりするほど芦屋のことが好きであり、芦屋市民であるということに誇りを持って生活していると感じます。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思えますか？


人々が選んでくれるまち、 芦屋の子どもが将来帰ってきたくなるまち

少子高齢化と人口減少の中で、若い人にも選んでもらえるまちになっていけばよいと思います。特に、芦屋の子どもたちに芦屋への郷土愛・地域愛を育んでもらい、帰ってきたくなるようなまちになってほしいと思います。このまちに住んで良かったという原体験があれば、一旦外に出ても必ず帰ってくるでしょう。

新しい人たちを取り込んでいける魅力を発信できれば、さらに魅力が増し活気があるまちになっていくのではないのでしょうか。

住みよいまちを維持していくだけでは沈む一方なので、より良い方向に高めていければと思います。


◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために
必要な取組は何だと思いますか？

 住環境をよくするための産業配置で
ブランド力を高める


住環境が芦屋のブランドイメージであり、産業都市への転換は考えにくいと思います。

住環境をより良くしていくための産業をうまく配置することで、よりブランド力を高めることができるのではないのでしょうか。

文化的背景を持つ市民を巻き込んで文化的発信をしたり、飲食を活かして文化的価値を上げていくなどといったポテンシャルがあるまちだと思います。

 文化的歴史的背景などの対外的な発信

地域資源は全国的にも高いレベルにあると考えられますので、その魅力を対外的に発信していく必要があると思います。文化的な指標がひとつあれば、発信の仕方も変わるので、シンボリックなものができればいいでしょう。弥生時代からずっと人が住んでおり、在原業平や楠木正成といった歴史上の人物にゆかりがあるなど、文化的歴史的背景があるので、そういった部分をもっと前面に出すべきだと思います。

 子育て環境、教育環境の充実

子ども医療費が中学3年生まで無料になりましたが、保育所なども十分とはいえず、やむを得ず他の市町を選択する人もいるので、子育て世代を呼び込むには、子育て環境や教育関係の充実が必要だと思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

世界で「唯一」のまち

このまちが一番だと思って住んでいる住民にとっても、外から見ても唯一のまちであってほしい。ひとり一人にとって唯一のまちであれば、選んでもらえるまちになるだろうと思います。

NPO法人 芦屋市国際交流協会

会長 戸田敬二さん, 理事 河井俊彦さん, 事務局 大石牧子さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

自然が豊かで安全・便利なまち

姉妹都市のアメリカ・モンテベロ市から留学生が来た時には必ず芦屋市内を案内しますが、その時は「芦屋は山と海に面しており、2つの川があり、自然に恵まれた安全で便利なまち」と紹介しています。

高級住宅都市、 住んでいる人がフレンドリーなまち

芦屋を象徴する一番のポイントは、やはり高級住宅都市という芦屋のブランドです。これは大切にすべき特徴だと思います。

また、芦屋に住んでいる人はフレンドリーで、元気なシニアの方も多いのが芦屋だと思います。

ゴミのないきれいなまち

芦屋の人は、いつも自分の家の前をきれいに掃除しています。ゴミがありません。まちを美しく保つ習慣が身についている人が多いからでしょう。

南北間の移動が不便、利用しにくい鉄道駅

芦屋市は南北に広がっていますが、南北間の交通はバスしかありません。特に山の手地域では坂が急なため、足が不自由になった場合などは移動が大変です。

JR芦屋駅は車椅子での利用がしにくく、送迎する車の停車スペースが狭いと思います。

子育て世代に少し厳しい

近隣市に比べると、高齢者には優しいまちで

すが、子育て世代には厳しいまちのように感じています。例えば、こども医療費助成制度などの導入も遅かったし、保育所の件もまた然りで、子育て支援サービスの充実を期待したいと思っています。

色々な国の方が住んでいるまち

外から見ると、山の手地域にドイツやタイなどの在外公館があり、姉妹都市はアメリカのモンテベロ市なので、そのような国と交流をしているイメージがありますが、それ以外にも在日韓国系、中国系、ヨーロッパ系、ベトナム系、インド系、南米系など色々な国の方が住んでいます。

国際交流協会では、そのような外国人の方やその子どもさん向けに日本語教室や交流会なども開催しています。



◆ 芦屋市の強みは何だと思いますか？

色々な強みを持っているまち

美しい自然環境、閑静な住宅地、交通の良さ、美しいまちなみ、美術博物館や記念館、個性的なレストランや店舗の存在など、芦屋市の強みはたくさんあると思います。

また、小都市ながら市民の文化度が高く、センスがあり、治安もよく安心して暮らせるまちです。元気なシニア層も多いと思います。



人のつながりが強い

アメリカ・モンテベロ市との交流は57年間、途切れることなく続いています。これほど長く交流が続いているのは珍しい方だと思います。これは人のつながりがあるからこそ。

我々のNPO活動は多くのボランティアの方の協力で成り立っています。そういう意味で、芦屋は人のつながりの強いまちだと思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？

在住外国人の支援と市民の国際性向上

国際化と言っても色々な側面があります。芦屋市はインバウンド観光客も少ないと思います。我々としては外国人の言葉、文化面の支援、芦屋市民の国際性向上、国際性を持つ若者の育成に寄与したいと考えています。

近隣都市との連携がとれたまち

狭い芦屋市で全ての生活サービスを充足できるまちをつくる必要はないと考えています。近隣都市間で必要な生活サービスの役割分担をすればいいのであって、例えば、ショッピングを楽しむ場合でも、電車に乗れば大阪や神戸、西宮にもすぐに行けます。

そういう意味で、芦屋市は住みよい「住宅都市」を目指すべきです。市民が身のまわりの環境をきれいにしておくことが芦屋のブランド価値を高めることになると思います。

芦屋ブランドの感じられるまち

芦屋ブランドとは、歴史や伝統を感じられるヒトやモノの存在。その背景にある、他都市では真似のできない厚みのある芦屋の誇りやプライド的なものを言うのではないのでしょうか。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？



南北方向の公共交通の充実

南北方向の交通の便が悪いので、例えば、市内各所の病院や公共施設を循環するコミュニティバスなどが運行されればと思います。



災害に強いまちづくり

平成30年の台風21号で高潮災害が発生した際には、この潮芦屋交流センターが近所の方の避難所の役割を担いました。

近年、多発している自然災害に備えるためにも、災害に強いまちづくりが大切だと思います。



人のつながりを大切にする市民活動の支援

災害時の助け合いも国際交流も全て人のつながりが基本となります。

国際交流の取組である姉妹都市との学生交換制度も、相手国との良好な関係形成や受け入れ先のホスト・ファミリーの協力が不可欠です。これらが継続出来ているのも、これまでの交流活動で培ってきた市民レベルでの信頼関係がベースとなっています。

是非、行政の方でも、人のつながりを大切にしている市民活動を支援していただきたいと思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・



気品の高いまち
国際文化都市芦屋
住みたいまち など



老人クラブ連合会

会長 大嶋三郎さん、副会長 柴沼元さん、中村美律子さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

自然環境に恵まれた立地の良い、住みよいまち

芦屋は山と海が両方あって、自然が非常に恵まれたまちだと思います。これはお金を出しても買えない芦屋の一番の持ち味です。また、鉄道が3本もあって、大阪や神戸へ行くにも非常に便利です。買物にも、遊びにもすぐに行ける住みよいまちだと思います。

全国的な知名度は高いが、住んでいる人の芦屋のイメージと少し違う

兵庫県の芦屋と言えば全国的な知名度があります。これを芦屋ブランドとでも言うのでしょうか。しかし、市外の人々の芦屋のイメージは、何かの映像や書物からインプットされているようで、高級住宅地というイメージを持っている場合が多いと思います。でも芦屋に住んでいる私にとっては、そのイメージは身近に感じられません。「芦屋は良いね。」と言われても「どこが？」という感じです。

実際、高級住宅地という芦屋のイメージは、一部を除いて大震災以降、崩れてきているように思います。大きな区画の宅地が小さく分割されてきているのです。また、マンションも増えており、まちのイメージが変わってきています。



バス交通の便が悪い地域もある

自然が豊かで交通の便がいいまちですが、山手の方などは、坂がきつくてバス路線もないので、高齢者にとっては少し住みにくい環境だと思います。以前からバスを通してくれという地元の要望を聞いています。

また、近年、南の埋立地の方にも色々な施設が出来ていますが、国道2号よりも上の方に住む人がそこまで行くにはバス便が悪いです。乗り換えも必要になりますので。

◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

住民同士の横の繋がりをもちやすい

まちがこぢんまりしている分、住民同士の話し合いの場が持ちやすい、住民同士の横の繋がりが持ちやすいのではないのでしょうか。また、住民と行政の関係においても、行政は色々なことに関わりやすい環境にあると思います。

市民のポテンシャルが高い

芦屋には、市民参画や市民協働できるきっかけがたくさんあります。また、市民のポテンシャルが高く、まちの将来について話をする事ができる方もたくさんおられます。

社会的な地位も高くリタイヤされた方、著名な方もたくさん住んでおられるので、行政もいろんな知恵を拝借できるのではないのでしょうか。これは芦屋の強みと言えらと思います。

震災後、人と人のつながりが密になった

震災前は、隣の人と話さなくても過ごせていた状態が、震災後は挨拶ができる関係になりました。知らない人でも近くに人が歩いていたら

「こんにちは」という感じ。素っ気なかった人とのつながりがものすごく密になったと思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？

田園ファミリー都市

芦屋は小さなまちなので、私は「田園ファミリー都市」にしていかなければいけないと思います。家族で住めるような小さなまちというイメージです。

若い人が住みやすいまち

芦屋は高級というイメージがあるので、買物にしろ、住むにしろ、どちらかという若い人が暮らしにくいと感じているみたいです。芦屋は物価が高いから、私は西宮に住むという感覚です。

でも、これからは若い人にも芦屋に住んで頂かないとまちが成り立たないから、行政は、高齢者も然りだけれども、若い人が住みやすいという着眼点も持って欲しいと思います。

大規模な店舗があつたらいいなと思うこともある

私は、買物はいろいろなお店がたくさん入っている大型施設である「ららぽーと甲子園」によく行きます。芦屋にそのような大型施設を作れというのは無理な話だとは思いますが、ああいう楽しく買物ができる商業施設が市内にあつたらいいなと思う時もあります。移動に苦労する場合があります。

高齢者が元気なまち

昔の高齢者と比べたら今の高齢者はかなり元気です。それには医療の充実も貢献していると思いますが、私たち老人会でも、元気に老後を楽しむ高齢者の居場所づくりに取り組んでいます。

趣味やスポーツなど自分たちの好きなことに取り組むことで、介護保険のお世話にならな

い元気な高齢者を増やしたいのです。

そのためには、皆さんが仲良く集まって楽しめる場所が必要になります。ところが、今の芦屋にはそのような所がありません。集会所はいつも満員ですし、高齢者が入る余地はありませんので、今後、そのような場所があればありがたいと考えています。「きょういく（今日行く）」と「きょうよう（今日用）」が大事だということは、その通りだと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思えますか？

ITを活用する

今、急速にITが発達してしまので、いろいろな分野でITを活用して欲しいと思います。10年、20年後は、誰もが何気なくITを使いこなしている時代になるでしょう。今の子どもを見ていたら本当にそう思います。

ITで今後の世の中がどのように変わっていくのかは、私たちにもわかりませんが…。

安全で安心なまち

災害がいつ来るかは誰にも分かりません。しかし、芦屋では、特に水害・津波への対策を十分に考えておく必要があります。ぜひ災害に強いまちにして欲しいと思います。それは市民が安心して暮らしていくために非常に重要なことだと考えています。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと……

田園ファミリー都市
安全で安心できる活気のあるまち

「しんなりとしたまち」ではなく、若い人から高齢者までが一緒に住んでいる、安全で安心できる活気あるまちが理想の姿だと思います。

男女共同参画団体協議会

会長 羽賀紘一さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

市外の人と市民の思っているイメージは違う

芦屋のまちのイメージは、市民の人に聞く場合と市外の人に聞く場合で答えが違うと思います。おそらく市外の方は「セレブ、お金持ち、高級住宅地」というイメージを持っていると思いますが、市民はそんなことは思っておらず、「海、川、山に恵まれた景観と街なみがきれいなまち」というものではないでしょうか。

環境の良いまち

朝、芦屋川沿いを散歩することが多いですが、その度に感じることは、芦屋のまちは、自然環境に恵まれ、街並みもきれいに整備された本当によいまちだということです。都市の中に自然が溶け込んでいるような印象で、海の匂い、川辺の匂い、山の緑の匂いを感じながら散歩すると、こんな環境の良いまちは他にはないといつも感じています。

住む人の心があたたかいまち

まちを行き交う人も親切で、すぐに知り合いになれます。芦屋は心あたたかい人が多いと思います。また、海外旅行などから帰ってくるとまちが非常に静かで、ホッとするのが正直な印象です。

便利なまち

日常生活面から言うと、大阪や神戸に近く便利なまちという印象もあります。

高齢の方が暮らしにくくなっている地域もある

山があつて住むには良い環境ですが、特に山の手地域付近は坂が急なため、足が弱い高齢の方

などは外出することが難しい場合もあります。家族に送迎をしてもらえればいいのですが、そのような家族が身近にいない場合、生活のしやすさを求めて、駅前のマンションなどに移られることもあるようです。

今、山の手地域では、空き家やマンションの空き室が増加していると聞いています。このような状況は今後、さらに増えていくと感じています。これは、芦屋市の今後のまちづくりの大きな課題ではないでしょうか。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

美しい自然環境と心のあたたかい人の存在

重複しますが、やはり、「海・川・山の自然が近接しており、景観が素晴らしく、ウォーキングが楽しめる点」、「心のあたたかい人が多い点」、この2点は芦屋市の強みだと思います。

市民活動が活発なこと

ボランティア団体や文化・体育団体で活動する人の多いまちであり、これが芦屋市の強みだと思います。

ただ、活動団体が多いため、公共施設もいつも予約がいっぱいで、部屋が利用できないこと

が多く、困ることがあるのは事実ですが、それだけ市民活動が盛んということが言えるのではないのでしょうか。

「男女共同参画」の視点は溶け込んでおり、意識しないことが多い

男女共同参画に関わる活動をしており、色々な団体の方と話をしますが、「男女共同参画」に関わる話が出ることは多くはありません。

逆によく話に出るのは「構成員の高齢化問題」、「組織の後継者問題」などです。どこの団体も組織継続の点に困っているようです。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？

男女ともに多様な生き方が選択できるまち

赤ちゃんから高齢者まで、女性も含めて多様な生き方を認め、各人が生き方を自由に選択できるまちになってほしいと思います。

人口が現状維持されており、世代交代が円滑に進むまち

市の人口は、現状維持がいいと思います。人口が減っていくのは困ります。現在、高齢の方は将来いなくなりますが、その代わりに若い人が入ってくるまちが理想で、まちの世代交代が円滑に進むまちが望ましいと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？

行政職員の働き方改革

人生において大切なことは、「家族」と「仕事」の両面で充実していることだと思います。

仕事面では、現在、国で働き方改革が進められていますが、行政職員が働き方の模範を示すことが重要だと考えています。

「隗より始めよ」という言葉がありますが、

市役所は市内で最大規模の事業所なので、その市役所がモデルとなるような働き方を示すことが重要ではないのでしょうか。

家庭での男女共同参画の徹底

今の社会では、男性も家庭生活での役割分担が求められます。残業などで家庭内での役割を疎かにするようなことでは、家族関係はギクシクするように思います。

男女共同参画に関わる研修・教育の充実

男女共同参加を推進するためには、ワーク・ライフ・バランスや男女共同参画にかかる研修・教育を充実することが重要です。それも一度きりの研修ではなく、定期的な研修の継続と開かれた相談窓口の設置が必要です。

さらに、女性の能力をもっと活用することも大切で、例えば女性で起業を目指す人や起業家を応援する積極的な施策が必要になります。

これらは全てキャリアデザイン形成につながる取組ですが、私は、自分の人生目標やそれに至る計画をしっかりと持って暮らしていくための研修機会をもっと増やしていければと考えています。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

男女共同参画を実現したまち

芦屋観光協会

理事のみなさん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

歩道が狭い

観光協会では街歩きを担当していますが、歩道が狭いと思います。歩道が狭いと、案内するにも怪我などに気を使います。特に阪急芦屋川駅から南へ行く時、10人や20人の人をまとまって案内するのは難しいです。道幅を広げるのは大変かとは思いますが…。

屋外広告物条例が厳しい

芦屋市は国際文化住宅都市という看板を掲げていますが、住宅以外の商工業、観光業などの部分については、かなり否定的な感覚を持っているのかなと感じています。

その一つが屋外広告物条例。あれだけ厳しいものが出来たわけですが、商工業者の意見はあまり取り入れられませんでした。本来、まちの中には、住宅も公共施設も飲食業も小売店もあります。それ全体がまちづくりだと思います。住宅だけを優先するのではなく、もう少し全体のバランスが取れたまちづくりをして欲しいと思います。



風光明媚なまち

良い面では、まちのつくり方というか、ロケーションというか、芦屋はとても風光明媚なまちだと思います。他市とは、まるっきり違う印象を持つことがあります。

◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

プラスのことを言うのは難しい

私は、残念ながら強みはないと思っています。他市と比べて飛び抜けて魅力的だとか、住んでいる人にとって優越感があるとはさほど思えません。

駅周辺の使いやすさが問題

国際文化住宅都市となっていますが、国際的でもなければ、文化的でもないと思います。住宅都市として優れているかと言えば、歩道が途中で無くなっている場所などもたくさんあるので、そう思いません。

特に駅周辺は気になります。高齢の方や立場の弱い方にとっては決して使いやすい状態ではなく、阪神やJRの駅周辺はある程度は開発されているものの、阪急芦屋川駅の近くは全くの手付かずの状態なので、もう少し見直すべきだと思う。

芦屋ブランドがある

私は、他市からみると芦屋ブランドというものがある、まちのイメージは良いと思います。ただ、それを間違えて認識し、商売をしたら大変な目に遭うかもしれません。



本当は良いものが埋没しているまち

国際文化住宅都市と言っていて、文化自体はあることはあり、市域が狭く、何となく集まっているけれども、それが伝わらないから皆さんはそれ以上に不満の方に目がいくのではないのでしょうか。私は、本当は良いものが埋没していると思います。



芦屋に住んでいることに誇りを持っている人が多い

私は、結婚を機に芦屋に引っ越してきて、20数年芦屋で暮らしてきましたが、芦屋の人は穏やかで落ち着いた感じがします。

また、芦屋に住んでいることに對して誇りを持っている人が多く、皆さんちゃんとしようという思いを持って住まれていると感じています。それが芦屋の人の魅力であり、芦屋市自体の魅力でもあると思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思いますか？



バランスの取れたまちづくり

私は、バランスの取れたまちづくりを望みます。芦屋のまちづくりは、これまで地元の方が行ってきました。そういう方々が高齢になり、まち並みが変わってきました。戸建てがマンションに変わり景観が変化してきているのです。

この変化は致し方ないとは思いますが、今後、どういうまちづくりをしていくのかは、条例で縛りすぎないようにして、行政が真剣に考えていかなければいけないことだと思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？



賑わいのできる拠点づくり

社交場とか、みんなが集うところが必要だと思います。立ち飲み屋さんなどもいいかもしれませんね。今の芦屋は、20時以降は人が歩いていませんから…。



独自性のあるまちづくり

住みたいまちランキングなどは特に意識しないでもいいと思います。ただ、独自性は持っておかないとダメです。安っぽい考え方になるとそこが欠落していく。崩れていくのか恐ろしい。一度崩れたらもう元には戻らないと思います。



市民が自分たちのまちは素晴らしいと思うこと

芦屋のまちをつくってきたのは市民です。例えば大雨や大風で物が飛び散っていても、家の前であれば普通に掃除します。他から来た人はそのことに驚くようですが、掃除をしないと掃除をした所との差が出来てまちとしての統一感は無くなってしまいます。やっている人は文句も言わずにずっとやっていますが、それが人として一番大事なことではないのでしょうか。

まちの統一感、それは人の心の豊かさにつながることにもっと気づいて欲しいと思います。結果的に緑が多くなったり、景観が維持されたり、お互いの思いやりにつながって、こういうまちなら住みたいと思って来る人が増えるのだと思います。

私は、まちをつくってきた市民自身が、「私たちのまちはこうなんですよ」と胸を張って言って欲しいと思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

「**バランスのとれたまち**
国際文化住宅都市」

- 見た目において良いまちだと思えるバランスのとれたまち。
- 国際文化住宅都市は、文化と国際に重きをおいたバランスの取れたまち。今はまだ出来ていませんが、本来の理想はここにあると思います。

芦屋神社

宮司・平成 29・30 年度文化推進審議会委員 山西康司さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

まちがきれいで、市民マナーもよいまち

きれいなまちで、人が安心して暮らせるような良い環境にあると思います。

例えば、まち中の公園にはゴミが落ちておらず、砂場もきれいです。これは地域の人たちが日々、美化活動に取り組んでくれている成果だと思います。他都市の公園ではこうはいきません。

市民マナーも良いですし、自らの健康に対しても気遣いのある人が多いと思います。毎朝ウォーキングしている人もたくさんいますし、芦屋神社の境内にも多くの方がやってきて交流をしている姿をよく見かけます。

芦屋に誇りを持っている市民の方が多いのでしょうか。

文化的資源に恵まれたまち

例えば、谷崎潤一郎の文学、芦屋を舞台にした能、フランク・ロイド・ライトやヴォーリズなどの有名建築物、芦屋発祥の前衛芸術「具体」など、芦屋は豊富な文化的資源に恵まれたまちだと思います。



◆ 芦屋市の強みは何だと思いますか？

文化的素地のある人材が豊富

芸術・音楽・芸能などの文化に対する理解がある市民が多いこと、これが芦屋らしさで、また強みでもあると思います。芦屋のまちは文化的素地のある人材の宝庫と言えるのではないのでしょうか。

著名な多くの方が芦屋に住まわれている

音楽家や芸術家など、世界的に活躍されている著名な方々が芦屋にお住まいになっていることも芦屋の強みだと思います。このような著名な方々と芦屋のつながりをもっとアピールしてほしいと思います。

顔の見える人間関係が残っている

「祭り」や「だんじり」などは都市部では廃れていく方向にありますが、芦屋には、それらが残っており、いい意味での「田舎らしさ」があると感じています。これは、その地域に顔の見える人間関係が残っているということに他ならず、非常によいことだと思います。

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思いますか？

芦屋を感じさせる場所のあるまち

芦屋は自然がいっぱい残っているし、海辺から山まで歩いて移動できるコンパクトなまちです。しかし、例えば、芦屋の玄関口（JR芦屋駅）に降り立った時に、芦屋を感じられるような景観や雰囲気はありません。

今後は、芦屋を感じられるような場所や雰囲気の創出を期待しています。

★ 芦屋にふさわしい生活スタイルが守られたまち

芦屋に住むということは、芦屋のまちにふさわしい生活スタイルをすることです。それは、日々の市民の行動に現れてくる生活マナーです。

生活マナーのよい人が増える芦屋のまちになってほしいと思います。

★ 「文化のまち」として他都市と差別化されたまち

芦屋にはたくさんの文化的資源があるので、それらを国内はもとより海外へ積極的にアピールすることで、芦屋を「文化のまち」として他都市と差別化することができるのではないのでしょうか。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために 必要な取組は何だと思えますか？

★ 芦屋在住の著名人に協力してもらえる仕組み

芦屋には世界的に活躍されている著名な方々がお住まいですが、その方々が地元の芦屋で、例えばコンサートや舞台などを開催する機会はそう多くはないと思います。そのような機会が増えることで、芦屋が注目を浴びるようになり、全国から人が集う契機となればいいと思います。

また、そうした方々の様々な活動をつなぐ取組も必要ではないでしょうか。例えば「音楽」と「食」をつなぐ取組など、異なる分野の人をつなぐ（コーディネートする）人材がいれば、それらの方々の活躍の場はさらに広がることになると思います。

★ まちの情報を発信する

20～30 歳代の若い人に住んでもらうためには、まちづくりに関する情報の発信が大切です。芦屋にも様々な地域があるので、市内をエリア分けして、それぞれの地域の情報発信が必要だと思います。

情報発信により、それに関心を持つ若い人が

増えれば、芦屋に若い人が集うことにつながります。何か人を結びつけるような核となるモノ・場所・イベントなどの情報発信が、地域の新しいコミュニティ形成につながるような契機となればよいと思います。

★ 地域に対する思慕の念を培う

「祭り」とか「だんじり」など地域にお互いの顔が見える人間関係が残っているということは、災害などの際に住民同士が助け合える信頼関係があると言えます。これは大切なことです。私は「だんじり」の皆さんに子どもたちを祭りに誘って欲しいとお願いしています。それは、子どもたちが「だんじり」に触れることで、地域に対する思慕の念が培われると考えているからです。是非、そのような取組を進めて欲しいと思います。

★ 多様な人のつながりを深める

芦屋にはサロン文化（仕事のつながり、趣味のつながり、地域のつながりなど）があります。ただ、それらのサロンは限られた人の小さな集まりが多いように思います。それぞれが個別に活動しており、互いのつながりが弱い点が気になります。もっとお互いのつながりが深まればいいと感じています。

★ 芦屋ジェントルマンを育成する

生活マナーのよい人が増やすためには、子どものころからの教育が重要になります。この教育は、いわば芦屋ジェントルマンを育成するような取組であり、今後重要になると思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

「 折り目正しいまち 」

芦屋のまちにふさわしい生活スタイル、生活マナーを理解して、それを実践する人が増えることを願っています。

芦屋新世会

代表 島谷充彦さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

山・川・海があり、便利で住みやすいまち

山，川，海があり，気候が良くて，自然災害が少なく，また神戸と大阪の間にあり交通も便利で，地理的にも地形的にも大変住みよいまちだと思います。

芦屋で生まれ育ち，暮らし，死ぬまで芦屋で過ごせるような村意識のようなものも感じます。

高級住宅街だけでない様々な顔がある

市外から見れば高級住宅街というイメージがありますが，それは一部であり，住んでいる者からすれば下町情緒や南部の新興住宅地，打出には若い家族が住むなど多様な顔があります。住んでいる者と外からみたイメージにギャップがあります。

暮らしと消費が一致していない面も

「芦屋で商売していれば安泰でよく売れるでしょう」ということを言われますが，芦屋の人が芦屋市内で飲食しているイメージはあまりありません。高級住宅街なのでブランドショップがあってもよいはずですが，進出しない理由があるのでしょうか。大阪，神戸へ出やすい土地柄なので，芦屋に住んでいてもそちらで食べたり買い物したりしているのでしょうか。

本当の「芦屋らしさ」を見つけれない

高級住宅街や金持ちはまちの一部でしかなく，商工会でイベントをしても「芦屋らしさ」を出すのが難しいです。「芦屋ブランド」とは「知名度の芦屋」ということかもしれません。この「芦屋らしさ」の答えが見つかったときに，

芦屋というまちが完成できるのではないのでしょうか。

例えば，フィギュアスケートの三原舞依さんやシンクロナイズドスイミングで銅メダルに輝いた芦屋大学のかたなど，芦屋で活躍している人をアピールしたらどうでしょう。

◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

全国的な知名度と交通の利便性

まちの自慢は知名度が全国区であること。そして商売の上で満足しているのは交通の利便性です。狭いまちの割には国道が2本，鉄道もJ Rと私鉄2本で駅が4つもあり，市外から来てもらうためにも便利なところですよ。



◆ 10年，20年後の芦屋はどんなまちになっていけばいいと思えますか？

市外からの移住者が増えて 商工業が発達するまちに

いいとこですよとアピールができて，市外からもあこがれのまちとして移り住んでもらい，芦屋の人が芦屋で食事し買い物して，それに伴

って商工業も発達していけば一番良いと思います。

今後もベットタウンという位置づけは変わらないと思いますが、そこからどう広げていくのが課題です。

高級住宅街だけでない色々な地区の良さ、山のロックガーデンや海の砂浜やバーベキューできる場所、川遊びなど、自然の豊かさや遊ぶところも含めて知ってもらう必要があります。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために必要な取組は何だと思いますか？

行政・団体と事業者の連携で市民の理解を高める

商売人の立場からすれば、地元の住民に愛される事業所であることが第一で、そのためにも行政や商工会や自治会等の各団体と連携して市民に意識付けをしてもらうことが必要だと考えます。

例えば、芦屋市の業務を、一番安いわけではないけどこういう基準で使うと説明をしたうえで市内事業者に発注してもらうと、信用がついてお客さんも安心するという好循環が生まれます。これは事業者個人ではなかなかできないことです。

楽しく巡れるお店のある地域づくり

この辺は、震災前は芦屋で一番古い商店街で雨の日も濡れずに生活できるような地域でしたが、震災後はアーケードがなくなり店の数は半減し、新しい店も加わっています。もっと地元の人に来てもらえるようにしたいのですが、市場やスーパーがないのでそれを中心とした買物や散策の流れができず、ピンポイントで店を目指してやってくるのが現状です。子どもが少しでも店を覚えてくれればと思い、ハロウィンイベントでは店頭でお菓子をあげると子どもがまちを歩いてくれました。

山も海もあるし、お店があって、子ども連れでも散歩がてら巡ると楽しいといったことを

アピールできれば良いと思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

地 元 愛

地元の人に愛されないと事業を長く続けることはできません。地元愛から様々に広がっていけばよいと思います。

芦屋プロジェクト 2010

代表 姉川昌雄さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

清潔なまちだが、活力に乏しい

静かで清潔なまちですが、一方で、活力に乏しい（元気がない）ように感じています。障がいのある人も、高齢者も、どんな人も外に出て、ブラブラまち歩きが楽しめるまち、まちの適所にレストランやケーキショップなどのお店があって食事や休憩ができ、多くの人が気軽にまちを散策できるような芦屋のまちが理想です。是非、そのようなまちになってほしいと思います。



◆ 芦屋市の強みは何だと思えますか？

芦屋川を背景としたまちの景観

南北に細長い市域であり、その景観は六甲山を背に芦屋川に沿った自然景観が骨格となっています。これが芦屋市の最大の特徴だと考えています。

芦屋市には芦屋川の他に宮川があります。また、西宮市には夙川、武庫川（対岸は尼崎市）などがあり、阪神間の河川の水質はいずれも良好で、市民が水に親しみ、水を感じられる貴重な憩いの空間となっています。

芦屋川沿いは芦屋の文化的景観のシンボルとなっており、多くの市民の散策遊歩の場として親しまれ活用されています。（芦屋プロジェクト 2010 では芦屋川に繁茂している植物・ツルヨシの現地調査をこの4年間続けている。）

◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていれればいいと思えますか？

住宅や店舗等が上手く融合した楽しいまち

芦屋市は住宅都市ですが、すべてが住宅と言い切れるまちでもないし、むしろそうでないまちの方がよいように思います。住宅、店舗、事業所などがあり、様々な仕事をされている人がそれぞれ生活を送っています。多様な人々の生活が違和感なく自然に融合して近隣との交流がある楽しいまちが望ましい。

私の好きな街路空間のイメージ

店舗や住宅、道路が上手く融合している例として、私が好きな場所を形成しているのは、阪神芦屋駅の北側に東西に走る「鳴尾御影線」の打出に近い側の街路空間です。

その街路景観は、街路樹が大変綺麗で、道路幅員とのバランスがとてもよく、適所におしゃれな店舗もあり、とてもいい都市景観になっていると感じます。

子ども～大人まで、又、障がいのある人も、高齢者も、まち中でゆったりと生活を楽しめるまち

子どもから大人まで、障がいのある人も、高齢者も、まちの中でゆったりと生活できるまちづくりが必要と考えています。年齢も体の状態も関係なく、ゆったりと生活ができるまちです。

そのようなまちでは、ポケット広場や花壇、

街路樹などが美しく適所に配置され、そこにはベンチなどもあってゆっくりと休憩できるようになっています。その側では子どもたちが遊んでおり見る人を和ませています。それに加え、周辺にちょっとした喫茶店や洒落た店舗などがあれば、どんな人でも家の中に閉じこもらないで外に出てみようという気持ちになると思います。

◆ 芦屋市を魅力的なまちにするために
必要な取組は何だと思いますか？

 子どもの将来を豊かなものにする施策の推進

10年、20年後の芦屋市を考える場合に重要なことは、乳幼児期から小学校低学年までの大切な時期の家庭環境や公的環境です。その環境が良くなるような施策を進めていくことが最も重要です。

 市民の企画を実現できる場をつくること


文化的なイベントに関心がある市民は、芦屋市内のイベントに満足できなければ、大阪や神戸などの近隣都市の大きなイベントに行くことが多いのではないのでしょうか。

芦屋市内には文化的なことに興味・関心のある人も多いのに、それらの人が市外に出てしまっています。

市内にはルナホール・市民センター・美術博物館をはじめとする文化施設がたくさんあり、それらを活用した市民の企画を実現できる場がもっとあればいいと思います。そのためには、市民の企画を行政がもっとバックアップする必要があります。

 市民の企画を育て、芦屋独自の文化につなげる

市民レベルでのそのような動きが活発になれば、例えそれが小さなイベントや集いであっても、市民にとっては、とても有意義なものになり、さらに、それらが将来的に、子どもの成長とリンクして上手く育てていけば、芦屋独自の文化につながっていくと期待されます。

 市の課題を市民同士で議論する場づくり

最近では、市が先導して様々な課題を市民同士で話し合う場が設定されるようになってきていますが、日常的な場では市民同士が議論する場はまだ少ないと思います。

私の住んでいる地域では、阪神・淡路大震災後の復興過程の中で、地域でまちづくりのあり方（区画整理）を議論し続けました。毎週土曜日に集会がもたれ、区画整理事業の完了まで、ほぼ10年を要しました。非常に長い時間をかけることになりましたが、その長い議論を通じて結果的に地域のあるべき方向が住民意識の中でまとまっていったように思っています。

このような議論をする場が日常的にあればいいと思います。時には激しい議論になることもありますが、その議論を重ねることで、例え立場が違う人であっても、相手の立場を理解する機会となり、結果的に地域の合意形成につながっていくからです。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・

住宅を核とした賑わいのあるまち

芦屋森の会 2001

代表 村上敏彦さん

◆ 芦屋市はどんなまちだと感じていますか？

生活する上でほどよい広さの市域

日常の市民生活をしていく上で、市域がほどよい広さであり、このため、1)山・海・川に近く自然環境に親しみやすい、2)閑静で清潔感がある、3)公共機関・施設への交通の便・道路の便がよい、4)都市サイズが小さくても人や建物などの混雑がない、5)射幸心をあおるものがない、といった特徴があり、これは同時に芦屋の強みであると思います。これらは市民みんなが同じように感じている最大公約数的なことだと思います。

放ったらかしにされている市街化調整区域

市が進めている道路沿道の花壇づくりや個人の庭のオープンガーデンなどはとても良いことだと思いますが、市街化調整区域は放ったらかしになっています。

「公園都市芦屋」と言われていますが、市街化調整区域には目が向いていないのではないのでしょうか。

六甲山は緑の森だが荒れている

明治時代にはげ山だった六甲山を、森林に戻す治山治水が始まりました。まず土砂流出を防ぐための森をつくり、その後、土壌が豊かになるにつれて樹種変換する考えでしたが、放置されてきました。

根の浅い樹木が主体であるため、放置されると、根返りを起こし地面が侵食されやすくなり、砂防ダムをどんどん造らないといけない状態になります。

しかし、もし本来の植生に戻っていくと、六甲山は照葉樹林の暗い森になります。

このような森も部分的に大切に、育成する必要があります。一方、季節ごとの彩りが美しく変わり、小鳥、昆虫の多い落葉の森も併せて必要です。

落葉の森は保健休養機能を持っています。この機能を発揮する森づくりと維持には行政と市民との協働が必要です。

特に六甲山系は大都市のすぐそばにある山「都市山」ですから、一層期待されます。




◆ 10年、20年後の芦屋はどんなまちになっていればいいと思いますか？

健康寿命を延ばし 平均寿命との差が一番近い都市

人類の遺伝子は森の間で培われてきましたが、今はストレス社会で遺伝子が悲鳴をあげています。健康寿命を伸ばすために、そのストレスを少しでも癒すための手立てが森林療法だと考えています。

森の施設整備、心理・理学療法士、医師などの医療機関、それからこれらを支援する市民が森を舞台に連携する必要があると考えます。



観光ではなく文化交流を中心に、 適度なサイズを目指す

全国的に観光立国を目指す話を多々聞くようになりましたが、歴史、文化、言葉、考え方の異なる人々が観光目的で来られては、混雑、トラブルなどで市民が払う代償が大きくなります。六甲山もオーバーユースになっています。

狭い芦屋を観光化すると六甲山だけでなく、市街地もと心配します。

どのくらいの規模の果実を求めるのが大事で、芦屋のような小さい都市には現状の規模の小さい果実が適当だと思いますが、一層の人的交流は必要と思います。


観光振興目的のホテル、娯楽施設ではなく、国際的、文化的交流に特化した施設・人材を充実することです。

◆ 芦屋市の理想的なまちにするために 必要な取組は何だと思いますか？



近隣都市との協力・連携の強化

芦屋市だけで何でもやろうとするのではなく、近隣都市との連携を考えていかないとけません。芦屋の規模に沿った政策と西宮市や神戸市の政策をどう機能分担をして連携するかということです。



活動団体との連携に柔軟な行政運営を

当会では研究会の立ち上げ時から他団体と笹刈りをして草原の保全・再生を目的とする活動をしています。

また、市の旧青少年野外活動跡地で森林の保全活動と環境学習活動を2001年から続けております。

これらの活動の中で、地主の許可、老朽した橋の改修、ハイク道を塞ぐ倒木処理、土砂崩壊部の保全、森林体験、環境学習などがあります。これらの取組の中で行政側の一層の支援をお願いしたいと思います。

◆ 芦屋市の理想の姿を一言で表すと・・・



保健休養機能のあるまち

森とまちの機能のネットワークにより、森だけでなく、まち全体の保健休養機能を高める。